

## 「私」と〈私〉

永井均

日本大学文理学部

水本氏の問題関心は経験科学との関係という点にあるようなので、私の直接の関心事からは離れるが、試みにその観点から私の問題意識を記述してみたい。

概して経験科学は当の経験の主体が私であるか他人であるかの違いを無視することから出発しているように思われる。その意味では十分に経験的ではないある前提に基づいているといえる。それは、私と他人の本質的な同型性という前提であり、私見では言語によってもたらされたものである。しかし、とくに経験科学にかぎらず、それとある点では対立するであろう宗教や、さらにほとんどすべての哲学（形而上学を含む）もまた、たいていの場合、はじめからこの前提に基づいて成り立っている。（哲学の場合、他我問題という形でこの問題を扱うことがあるが、その場合でさえもこの前提を崩さないことは注目に値する。）これに対して、私の哲学は（いわば経験科学以上に経験的に）私と他人の根本的な違いという、この端的に与えられた事実を無視せずに、そこから出発し、同型性の前提そのものがいかにして成立するかを研究対象とするものである。

そこで今度は、この問題の出発点を、経験科学的知見を前提にして記述してみよう。たとえば脳科学や神経科学の教えるところによれば（そして今日の常識的な世界観から言っても）、意識現象は脳や神経の働きに依存するものである。ところで、ほぼすべての人間にはほぼ同じように脳や神経があり、それがほぼ同じように働いているとされる（し、実際にそうであろう）。ならば当然、すべての人間には同じように意識現象が生じているはずである。それなのになぜ、経験的事実に忠実であるかぎり、いつも特定の一人の人間（すなわち永井均という人）の意識現象しか現実には現象していないのだろうか？ このあまりにも根本的な自他の分け隔ては、どこから、いかなる原因によって、生じているのだろうか？

この問題に経験科学的説明を与えようとするなら、個体の個別性によってそれを与えるしかないように思われる。すなわち、各個体は各個体の意識体験を持ち、それ以外の個体のそれは持てないのだ、と。しかし、経験に忠実であるかぎり、そのような事実はどこにも見出せない。各生物個体（あるいは各脳）に各意識が一对一に対応している、などという事実は、現実には与えられていない。だから、そうなっているかどうか、私は知らないし、おそらくは知りえないだろう。意識現象の実例は、実際にはなぜかただ一つしか与えられていない。だから、経験に忠実であるかぎり、その一つ以外には意識現象は生じていないと考えてもよいはずなのに、そうは考えないとすれば、それは何故なのか？ 自他のこのあまりにも根源的な差異はいったい何によって埋められているのか？

さて、以上の記述における、「（経験科学以上に）経験に忠実であるかぎり、ただひとつ現実に存在する意識現象」（「意識現象の主体」といってもよいがその差異はここでは本質的な問題ではない）が、すなわち〈私〉である。さてここで最初の問いが持ち上がる。そ

それは、なぜ〈私〉などが存在するのか？あるいはむしろ、〈私〉が存在するとは何が存在することなのか？というものである。もし意識現象（いわゆる「自己意識」を含めてもかまわない）がすべての人間（ひいてはすべての動物）に生じているのだとすれば、〈私〉にだけ生じている（ある意味では「全て」であるような）その異様なものは（単なる意識現象ではないとすれば）何か？そしてそれはいったい（脳や神経によってではありえないとすれば）何によって引き起こされているのか？もし意識現象がすべての人間（ひいてはすべての動物）に生じているのだとすれば、そのうちただ一つだけ、例外的に、実際に現象している意識現象というものがあること、すなわち〈私〉が存在していることなどは、まったく不可解で余計なことではないか？（そんなものは無いほうが渡辺氏のおっしゃるエレガンスの原理にかなっているのみならず、そもそもそんなものがあるということ自体、何があることなのか理解不可能ではないだろうか？）その不可解で余計なものは何であり、何によって生じているのか？

これが経験科学によって答えることができない、典型的に哲学的な問いであることは、次のように考え進めてみればすぐにわかる。すなわち、この事実を不思議に思った私が経験科学的探求に乗り出し、先ほどの意識個体の個別性という説明を超えて、この事実を説明できる経験科学的発見に達したとしよう。それはたとえば、私だけ実際に脳の構造に何らかの違いがあることが判明した、というような（何かそれに類する）事実でなければならぬ。「なるほど、これで分かった。それで私だけ現実に意識現象が成立していたのか！」。これはなかなか興味深い状況ではある。私が発見した事実そのものは経験科学的事実なので、もちろん他の科学者にも検証してもらえる。しかし、発見されたその事実が当初の問題を説明し解決してくれることはありえない。なぜなら、当初の問題そのものは他者と共有されないからだ。（これはたとえば過去の存在に対する懐疑論が「五分前世界創造説」を裏付ける経験科学的証拠が発見されることによって解決したり進展したりすることがないのと同じことである。）

意識現象の実例は、実際にはなぜかただ一つしか与えられていないから、経験に忠実であるかぎり、その一つ以外には意識現象は生じていないと言ってもよいはずなのに、そうは考えないとすれば、それは何故なのか？自他のこのあまりにも根源的な差異はいったい何によって埋められているのか？これが第二の問いであり、私の答えは言語のもたらす累進構造によって、というものだが、それは上述の（第一の）問いの意味が他人（読者の皆さん）に通じる（理解される）という点に現れている。

この論点についてはもはや書く紙幅がなくなったので、必要ならば口頭で説明することにして、関連する興味深いかもしれない事実にひとこと触れて終わりにする。「木」にせよ、「学校」にせよ、「大きい」にせよ、そうした通常概念はすべて、一つの概念のもとに複数の事例が対等に並び立つというあり方をしている。「私」（やその種のもの）はそうではなく、まずは事例の方が一つだけ与えられ、他の事例は概念の側から逆に想定されるという構造をしている。そしてそれゆえに、この種の概念は（はじめから間主観的に構成された概念であるがゆえに）通常概念よりもむしろ優れて公共的でなければならないという逆説が成り立つのである。